目次

第一講　演習問題(1)……p.2
第二講　演習問題(2)……p.6
第三講　演習問題(3)……p.12
第四講　演習問題(4)……p.16

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、**問一**～**四**に答えよ。

昔の隠者を思ふに、(1)徳ある人の世にしたふをむつかしがり、仇(あだ)ある人の敵(かたき)を恐れて、さてこそ名をも変へ、かたちをも忍びけめ。徳もなく仇もなき人の、たとへ四条五条に金の看板を出したりとも、訪(と)ふべきよしの人こそ訪はめ、さもなき人は見向きもせざ(a)らむ。幼な遊びのかくれんぼも、尋ぬる鬼のあればこそあれ、さるを浮世に隠れ顔なるぞ、なかなかはづかしき心地ぞする。

そもや我が身の上を言はば、かしこき陰を頼み奉り、官路に立ちしも久しけれど、(2)もとより毒にも薬にもならねば、人にあかれし身とも覚えず。雨露の恵み深くして、すなほなる国に鬼もなければ、世に人に我もあかず。ただ病に悩まされ、今は弓も引きがたく、馬にも乗りがたく、さても武士(もののふ)の名に数まへられんは、南郭(なんくわく)が竽(う)を吹きけんこの身の上のはづかし(b)ければ、老と病を一荷にして、浮世の関は逃れ出でたるなり。しかれば誰をおそれ何を恥ぢて、さのみは逃げも隠れもすべき。

さりとてまた貴顕の門松をくぐり、桃に菖蒲に袖振りはへて、ここの嫁入り、かしこの法事にも連なら(c)んは、いと見苦しう、(3)官事をさへ辞したればいかでかは。

すぎし比（ころ）、いづくの程にか、市中の門柱に「隠居某（なにがし）」と書ける家札を見て、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、「隠居したる慶び（よろこび）」とて、親しき限りは言ふに及ばず、疎き（うと）人々にまで訪はれて、門前しばらく市めけば、昨日の浮世よりやかましく、それまた謝せずばあるべからずとて、家を尋ね門叩かせて、「物申（ものまう）」に人を驚かし、隠居の礼にいそがしきは、(4)をかしかりける世のさまかな。

（横井也有『鶉衣』「隠居弁」による）

注

○四条五条――京都の繁華街。
○かしこき陰を頼み奉り――やんごとない主君の恩顧を受けて。
○南郭が竽を吹きけんこの身の上――吹けもしない楽器を吹けるように装って音楽家の中に混じり込んでいた斉の国の南郭のように、技芸もないのに人の中に立ち交じっていた私。
○貴顕の門松をくぐり――権力のある人の邸宅に年始の挨拶に訪問し。
○桃に菖蒲に――「桃」は三月三日の節句、「菖蒲」は五月五日の節句。
○慶び――お祝い。
○物申――「物申す」の略。訪問を知らせるため、外から家の中の人に呼び掛ける声。

問一　傍線（1）（2）を現代語訳せよ。

（1）＝

（2）＝

問二　傍線（3）を、必要な語句を補いながらわかりやすく現代語訳せよ。

問三　傍線（4）は、どういうことを「をかし」と言っているのか、説明せよ。

問四　二重傍線（a）～（c）について、文法的説明として適切なものを次のうちからそれぞれ選べ。同じものが複数回該当することも有り得る。

ア　助動詞
イ　形容詞の一部
ウ　助動詞の一部
エ　複数の単語（または単語の一部）の連続

（a）＝　　（b）＝　　（c）＝

模範解答

第一講

〔模範解答〕

問一（1）人徳のある人が俗世に慣れ親しむことを煩わしがり

（2）もともと害もないが役にも立たないどうでもいいものなので、人に認められた身とも思われない

問二（隠居した上に）武士としての役所の勤めまでも辞めたので、どうして世間の人と交わったりしようか、いや、しない。

問三 隠居をして静かに暮らすはずが、かえってたくさんの人に訪ねられて、隠居前よりもやかましい状態になり、また、そのお礼をしなければならなく、忙しくなったこと。

問四（a）エ　（b）イ　（c）ア

〔現代語訳〕

昔の隠者を思うと、人徳のある人が俗世に慣れ親しむことを煩わしがり、恨みを負っている人が敵を恐れて、それで名前も変え、姿を隠したのだろう。人徳もなく恨みも負っていない人が、たとえ四条五条〔＝京都の繁華街〕に金の看板を出したとしても、訪ねようというつもりの人は訪ねるだろうが、そうでもない人は見向きもしないだろう。子どもの遊びのかくれんぼも、探す鬼がいるからよいが、（探す人もいないのに）それなのに俗世で隠れるような様子であるのは、かえって恥ずかしい気がする。

それにしてもまあ自分のことを言うならば、やんごとない主君の恩顧を受けて、役人として勤めたことも長いが、もともと毒にも薬にもならない（どうでもいいものな）ので、人に認められた身とも思われない。雨露の恵みが深くて、素朴な国に鬼もいないので、世間にも人にも私も飽きてはいない。ただ病気に悩まされて、今では弓も引きにくく、馬にも乗るのが難しく、それでも武士の一員に数えられるようなことは、（吹けもしない楽器を吹けるように装って音楽家の中に混じり込んでいた斉

の国の）南郭が芋を吹いたとかいう（のと同様に、技芸もないのに人の中に立ち交じっていた）私が恥ずかしいので、年老いたことと病気を一つの荷物にして、俗世の関所は逃れ出た（＝隠居した）のである。そうなので誰を恐れ何を恥ずかしがって、そうむやみに逃げ隠れする必要があろうか、いや、ない。そうかといってまた権力のある人の邸宅に年始の挨拶に訪問し、桃の節句に端午の節句に袖を振って、ここの嫁入り、あそこの法事にも列席するようなことは、たいへん見苦しく、（武士としての）役所の勤めまでも辞めたのでどうして世間の人と交わったりしようか、いや、しない。

かつて、いつ頃であったか、市中の門柱に「隠居某」と書いた表札を見て、これは（よい）としばらく目が覚める気はしたが、今は自分のことになったので、「隠居したお祝い」と言って、親しい者は言うまでもなく、交わりが浅い人々にまで訪問されて、門前がしばらく市場のような賑わいなので、昨日の俗世よりやかましく、それもまた答礼しなくていいわけはないというので、家を訪ね（お供の人に）門をたたかせて「ごめんください」（の声）で人を驚かせ、隠居の作法に忙しいのは、おもしろかった世の様子だなあ。